

【第12回日本伝道協議会公開講演】

伝道こそ教団の使命

山 北 宣 久

日本基督教団は、1941年の6月24日に成立させられたのであります。ですから今度の6月24日は教団創立満60年ということになるのです。小島議長も、そして副議長たる私も、教団と同じ60歳となりました。いよいよ老境に入ったか、いよいよ円熟に入ったかと意見の分かれるところではありますが、しかし教団はこの60年の内30年を紛争に費やしてきました。「教団問題」というよりも「教団紛争」と表現した方がよい、苦々しい時を歩んで参りました。しかし私たちはこれをいかにしても「産みの苦しみ」として、21世紀を担う、また21世紀の教団に尽くしていく世代に私たちはなんとか「伝道する教団」としての有り様を整えて託すことにより、神への悔い改めの実をつけていきたいと願うのであります。副題として「伝道に燃える群れの形成を目指して」とつけました。「群れ」。これは教会の大事にしてきた言葉です。真の「君」の横に「羊」がいる。私たちは先ほど（讃美歌で）5回も繰り返して「君の君」と主の御名を賛美したのであります。私たちはそういわれてみれば、「イエス君はいとうるわし」「君なるイエスは」と賛美しているわけです。「真の君」、それはこの世の君主でもなく、君が代の君でもない。私たちは主イエス・キリストを君と仰いでいます。そしてその横に羊がいることによって「群れ」を形成している、これがキリストの体なる教会の現実です。

しかし教団は、今思いますと、真の君の横に立っているのか。そしてまた君の横に羊ならぬ狐や狸が立っているような現実。「群れ」と言えるのか、という思いを忸怩たる思いをもって考えざるを得ない。羊というのは、ただひとえ

に人間を暖めるためだけに生き、そして死んでいきます。私たち人間の中で羊の世話になっていない者は誰もいないのです。私たちは本当に人を暖める仕方において羊でありたい。真に弱く貧しい羊でありますけれども、イエスはあのヨハネの10章の中で「私はよい羊飼いです」と語り、「羊は羊飼いの声を知っている」といわれました。いろいろな声がまことしやかに聞こえる中にあって「羊は羊飼いの声を知っている」。そういう形において私たちは御言に聞きながら、群れを形成していく。しかも、伝道に燃える群れの形成を目指していきたい、それが私たちの心からの願いです。

伝道こそ私たちの使命。命の使い方。「伝道は聖書知識や神学を伝えるのではない。十字架に死に、復活されて天におられる御子イエス・キリストの事実を証言するのである。すなわち、聖霊によってキリストの十字架と復活を確信し、その事実を証言せずにはおれない必然に迫られて行うのが伝道である」。真にアーメン、然りです。聖霊によって、なのです。ペンテコステを礼拝したばかりの私たちは、「聖霊によって」という言葉を改めて伝道をなすべき気迫として実感させられようではありませんか。

そうせざるを得ない必然に迫られて行う。いやいやながら行うのではなく、やらなければならないから行うのでもないのです。必然に迫られて行う、そうありたいものだと思います。「私が福音を告げ知らせても、それは私の誇りにはなりません。そうせずにはいられないことだからです」、第一コリント9章16節でパウロがいったとおりです。たとえマイナスの状況にあったとしても、彼らはそうせざるを得ないという形において伝道にあたってきました。使徒言行録の8章4節を見ますと、エルサレム教会で迫害が起こった時に、「散って行った人々は、福音を告げ知らせながら巡り歩いた」。マイナスの中に伝道を持って行って、マイナスとマイナスでプラスに変えちゃった、ということが書いてあります。真にしたたかです。それは、そうせざるを得ない必然性に迫られていたからです。私の好きなことわざに、エジプトの「ナイル川にぶち込まれても魚をくわえて出てくる」というものがあります。いいですねえ、こういうの。「お前なんか死んでしまえ」といわれて川にぶち込まれて、「そうかい、

伝道こそ教団の使命

せっかくぶちこまれたのだから魚をくわえて出ていこう」。全くそのような形だったのがエルサレム教会の現実でした。「散って行った人々は、福音を告げ知らせながら巡り歩いた」。迫害にあってこの状況です。私たちは教団の苦難・患難・困難にあればこそ気がつかせられる、福音の真理に目覚めさせられて、福音を告げ知らせながら巡り歩いたその群れに加わらせていただきたいと思うのです。

今ひとつ、こうあります。「伝道とは教会がキリストの福音をもって人々に接触し、その福音によって人々が悔い改めキリストを救い主として受け入れるように導くわざ」。伝道の主体は教会である。「教会が」とあります。一人一人がバラバラになすことでもないのです。教会がなしていく。教会は、伝道することによって存在する、とあります。その通りでしょう。伝道なくして教会なし。教会は、伝道「も」するのではないのです。伝道することによって教会は教会になるのです。それを除いて教会の存在理由はありません。教会の存在そのものが伝道となる、そういう形において私たちは群れを形成していく。「church has missionではなく、church is mission」とあるのがそれです。ですから、伝道は一人一人の魂を導く救霊でありつつ教会形成を常に目指します。荒野の中にあって命の真清水に触れ、そこにおいて主の体なる教会に入れられてはぐくまれる。そういうことです。

なるほど、教会は礼拝を献げる場所です。しかしその礼拝は、祈りの霊に満ちた礼拝である以上、必ず伝道へと遣わされていく。私たちの教会（聖ヶ丘教会）の礼拝は、あの初代教会が描いてきたmissa ita est つまり「『ここでの礼拝はこれで終わった』、神を礼拝するために出て行って、主の福音を宣べ伝えなさい」と聞き、そして祝祷（第二コリント13：13）をいただくのです。「ここでの礼拝はここで終わった」のです。しかし、神を礼拝するために出ていく。

私たちは、そういう意味において、礼拝から伝道へ、そして伝道はまた礼拝へと送り返される。そういう循環を恵みの内に記していくのではないのでしょうか。使徒言行録13章 2 節。こうあります。「一同が主に礼拝をささげ、断食をしていると、聖霊が『さあ、バルナバとサウロとを、わたしのために聖別して、

彼らに授けておいた仕事に当らせなさい』。礼拝の中で、伝道に遣わされよと言う声を聞いたのです。聖霊がここから遣わされていく。その伝道の使命に礼拝からあたらせられた。私たちはそう読むことが出来ます。

かくして、教会は伝道のためにある。ということが分かります。である以上、日本基督「教団」、これは教会ですから、伝道の使命にあたるのが教団の存在理由にあたります。真に悲劇的だという風にも言えるかも知れませんが、日本基督教団、「団」となってしまったのですねえ。ところがご存じのように英語では United Church of Christ in Japan, “church” です。もう既に日本基督教会というというものがありましたから「教団」とつけざるを得なかったのですが、それにしても「団」というのはよくて「応援団」、悪くて「自警団」「暴力団」の「団」です。本当にこの「団」が「断腸」の思いでございます、これは。

ということで、United Church of Christです。伝道に熱を燃やしていくのです。それが教団の存在理由です。「伝道こそ教団の使命」。何を今頃当たり前のことを言っているのか、60年も経って。そういわれるべきところですが、これを原点としなければならないという事実があります。

教団が成立した時、ずいぶんの仲間が離脱していきました。もちろんミッションボードとの関係もありましたが、いろいろの現実もあったのでしょう。ちょっと差別用語かも知れませんが、こういう川柳がありました。「あたしゃイヤだよ教団風呂は 三助多くて湯がぬるい」。「三助」って若い人には分からないかも知れません。(解説しなければならないのが残念ですが) 昔は自分の家に風呂などなかった。そこで銭湯に行くと、背中を流す人がいた。そうした三助ばかり多くて肝心の湯がぬるい。

「湯がぬるい」。つまり、議論ばかりで伝道の熱が上がっていない。そう言ったのです。「湯がぬるい」ばかりでなく、教団は体温まで下がっているのではないか。実に暖かいものがないのです。教団の事務局に行って「おはようございます」と言っても挨拶も帰ってこない。挨拶もなかなか交わせない。私は神様に向かって挨拶するのでそれでいいのですが、本当に山彦が聞こえて聞こ

伝道こそ教団の使命

えるような状態です。非常に冷たいのです。愛が冷え、伝道の情熱が下がるのなら、何がいいのかと思います。私たちの使命は大きいのです。

前に聞いたことがあるのですが、「Totenkreuz」という言葉があるそうです。「死の十字架」というものです。これは、いよいよいまわの際になると、体温がどんどん下がって脈がどんどん上がる、そこで十字架を描くところで命が落ちる。この「死の十字架」は何とも象徴的だと思います。議論ばかり多くてその実、熱は冷めていく。なるほど行動は多いかも知れない。しかし主への忠誠と燃えるような信仰はどんどん下がっていく。教団は「死の十字架」を描いてはならないのだと思います。

日本基督教団が過去二回、二つの決議をしました。伝道を巡る決議です。一つは「日本基督教団は21世紀に向けて伝道の使命に全力を注ぐ決意表明の件」(31回総会)。それがその後福音派の人からいわれました。「教団って、伝道もするんですね」。ショックでした。「教団って伝道をするためにあるんです」と返したところ、「いやいや、社会運動しかしないのかと思っていました」「私も反省します」などと言われました。この決議で、はしなくもこのようなことが分かったということだけでも意義があったかも知れません。それに続いて、昨年の教団総会においては「日本基督教団は21世紀に向けて青年伝道の使命に力を注ぐ」という件を可決しました。これからこの実質化をいよいよ図っていかねばなりません。今年の教区総会の教団議長挨拶の一文を引用します。この二つの伝道決議が可決されたことを受け、「イエス・キリストの空虚な墓に立ちつくす弟子たちに向けて天使が告げました。『あの方は、あなた方より先にガリラヤへ行かれる。かねて言われたとおり、そこでお目にかかる』(マルコ16:7)。ガリラヤは、弟子たちが主イエスに出会った場所であり、弟子たちが主に従ってともに神の国の到来を宣べ伝えた場所でありました。その伝道の現場に立つことによって主イエスと共に生きるのです」。議長挨拶はこういう言葉で始まっているのです。ガリラヤ的な状況。それは私たちの生きる世界の現実です。しかしそのガリラヤでこそ弟子たちは主イエスに出会った。そしてそこそが弟子たちにされた場所。そして主イエスが伝道の第一声を上げて

神の国の到来を宣べ伝えた場所でした。その伝道の現場に立つことによって、主イエスと共に生きる。それが私たちのありようです。先ほどマルコの16章19・20節を聞きました。この箇所においては、弟子たちがもう一度使命、「命の使い方」を再確認させられた場所であります。「弟子たちは出かけて行って至る所で宣教した。主は彼らとともに働き、彼らの語る言葉が真実であることをそれに伴うしるしによってはっきりとお示しになった」とあります。

伝道、宣教、それは「主とともにある」という体験、まさに主のリアル・プレゼンス、生きる現実をこそ実感させられるものです。伝道というのはもちろんすぐに実を結ぶものではありません。結果が得られるものでもありません。しかしそこで与えられた御言を携えて向かっていく時、復活の主「私はあなたとともにいる」といわれ、主のご臨在を体験させられるのだ、ということです。「恐れるな。語り続けよ。黙っているな。私があなただけとともにいる」、使徒言行録18章9節。それが使徒たちの伝道のエネルギー、秘訣だったと思うのです。伝道という現場に身を置くことによって、神我らとともにいるという現実を私たちは知るということです。

しかし、この「議長挨拶」を教区総会においてなした時に、反応は皆温かいものばかりではありませんでした。特にこの伝道決議二回を受けて、これを冒頭に持ってきて、「教団は伝道をするのだ」と挨拶に書いて、教区総会に臨みました。非常に拒否反応が強い教区がいくつもあります。私もそのことを問安使として肌で経験しました。教区の名前は申し上げませんが、言っている内にご想像はつくかと思います。なんと言ったらいいいんでしょうか。「あんな決議は大政翼賛会的な雰囲気の中で決議したのだから無効だ」「教団の右傾化と伝道決議は同じ軌跡にある」「伝道は一人一人がするものであって教団がするものではない」「この伝道決議は宣教路線を歩んできた教団の積み重ねを根底から崩す悪しきものだ」。次々とそういう反応です。「あんなものは単なるスローガンじゃないか」、そういう声も聞こえました。私はミスター・サンドバックと自称しております。まるっきり打たれ続けておりました。しかし私はよかったと思います。そういう機会に、「いや、そうではないのではないか」と問安

伝道こそ教団の使命

使として熱っぽくそう言う人たちと話すことが出来ました。しかも私は質問している人たちよりも、その背後でじいっと聞いている信徒の人たちに語りかけました。信徒の人はそう思っていない。信徒は本当に、自分の教会は十年先、いや五年先にはどうなるのか、そう思って総会に臨んでいるのです。そんな勇ましい拒否反応、問安使をなんとかやっつけてやろうということだけでは反応しません。そういうことの中に私は望みを持ちます。そういう信徒の人たちは隠れキリシタンのように、すれ違うと「支持してます」とか、きょろきょろしながら「賛成です」とか言うんですね。本当に、信教の自由が保障されていないような状況です。夜寝ているとノックして、ニコデモが来たかと思うと、「伝道路線やりましょう」とか言ってきょろきょろして帰ってしまう。本当にすごいことですが、そういう状況が見られるんですね。

キリストとか復活とか十字架、私たちは当然のことを言っているのかも知れませんが、必ずしもそうではない。ちょっと難しい話になるかも知れませんが「教団の紛争は30年だ」と先ほど申し上げましたが、もっと根が深いものです。60年代初頭におそらく始まっています。52年頃からのキリスト教ブーム、また宣教師による大衆伝道への反省・批判からだったと思いますが、1960年と61年に教団の指導者たちが100人以上集められて「宣教基本方策研究協議会」というものをやりました。そして64年に教団は「宣教基礎理論」というものを発表したのです。それは、「教会の目を社会・世界に向け、覚醒と体質改善を図る。教会が世に対して上から語るのではなく、世からの問いかけを聞き、世の重荷を担い世と連帯し世に仕える」。そういうことで宣教方策をまとめたのです。ですから、世に仕える教会、歴史を担う教会、まことしやかに元気よく言われました。今でも、「問われている」「世に問われている教会」とよく耳にします。「問われている教会」と言うと、王手がかかったようなものです。私は「何を問われているのですか。本当に問うているのですか」というのです。「相手にしていないのですよ。教会に問うなんて」。私はそんなこと（問われていること）は残念ながらないと思います。逆にこちらから問わなきゃいけないのです。ニーズに応えよう、ニーズを知る、それももちろんそうだと思います。

けれども、世からの問いかけを聞くだけではないのではないか、と感ずるので

イエスはおっしゃいました。「あなた方は自分が何を求めているかも分かっていない」。本当に、何を求めているかも分からない者に対して、私たちは、私たちの方から問いかけていかなければならない。その御言を聞かなければならないのではないかと思います。しかし、ともかくこのような60年代の中から、個人の魂の救い中心の伝道だったら、「もう伝道というものはやめよう。体制変革だ」、この言葉がまことしやかに伝えられるようになりました。ここから、「キリスト、これは反権力の側にあり、収奪・篡奪された、人民の側に立つ革命の闘士だ」。60年代から70年代とずうっとそれで来たのです。「十字架、それは罪のあがないの十字架ではない。そうではなくて、反ローマと戦って死んだ、反国家の抵抗のシンボルである」「復活、死して甦らされたあの復活ではない。必ず体制は崩壊し、リベンジ、つまり復権する。そういう権力闘争の中での人民側に支配権が移る」。そういう復権としてしか復活を言わないということもあります。

変革を叫びながら実際はどうだったのでしょうか。見事に変質してきました。そして福音のなんたるかを知らない。そういう形で、私たち教団は十分に裁かれている。その結果、あらゆる面で数字的にも、私たちは見通しを失っています。数を頼みとしてはいけないといいますしそれはそれでいいのですけれども、献身者不足、財政の不足、年金の不安……。みんなこのことは私たちの教団が見事に復讐されている現実だろうと思っています。私は「戦争責任告白」と共に「伝道責任告白」をしなければならない、そういう思いをもって、「伝道こそ教団の使命」という事に当たっていきたいと思います。各個教会、全体教会のために私たちは力と祈りを合わせていきたいと思います。

1966年の10月に第14回教団総会で鈴木正久議長になって、今申し上げた「宣教基礎理論」を背景にしてこう言いました。「池で眠っているカモをねらい打ちするハンターのように、私たちは同胞を『伝道』という神聖な名で射止めるような気持ちではなく、同じアジア、同じ世界の問題性の谷間に生きる仲間

伝道こそ教団の使命

と連帯していく，そういうことをもって私たちは教団を形成していくのだ」。元気のよいスローガンですけれども，こういう言い方が私たちの今の教団にあって，本当に的はずれであったということをやはり抑えなければならないのではないかと思います。

宣教というのはもちろん必要です。主イエスは何をなされたのか。「会堂で教え御国の福音を宣べ伝え，ありとあらゆる病氣をお癒しになった」，マタイ9章35節にあるとおりです。教え，宣べ伝え，癒された。この3つの動詞，それ故に教育，伝道，奉仕という3つの名詞，それは宣教ということで大事にしていかなければなりません。この裾野をあくまでも広げていかなければなりません。しかしこれは，福音宣教であって，伝道，つまり福音を聞かせることによって悔い改めを促し，洗礼へと導いていく。こういう形において福音伝道を目指す福音宣教，あるいは伝道を目指す福音宣教という中にあって私たちはこの「宣教」ということをとらえていかなければならない。「伝道」か「宣教」か，ではない。また「伝道は伝道，宣教は宣教」でもないのです。「伝道を目指す宣教」として，私たちは教え，宣べ伝え，癒す。そういうスタンスを取っていきたい。

ところが教団は，私たちの愛する教団でありまして，ぼろくそに悪口を言っているのではなくて，もう一度整えるためには「宣教論は高度で伝道は下火」という状況はよくないと思うのです。宣教の豊かさといった多様化とともに伝道が相対化されることに終止符を打ちたいのです。伝道ということが死語になるのは，「これは西洋植民地主義的な形と重なるので伝道は斥けなければならない」。まともにそういうことをいうのです。「教化し，改宗し，同化する主義。それに否を唱えるのだから伝道に否を唱えるのだ。伝道というよりも，共に生きる共生」，そういうことだということです。

私は，「改宗」というのを聞いて「会衆主義のことか」と思い，私もバプテスト出身ですから「カイシュウ主義はいいものだ」と言っていたら，そうではなくて改宗・教化・同化という，異教徒を悔い改めさせるものだからいけないものなのだ，と言われ，驚きました。それから洗礼も同じだ，と。「これは教

会の型にはめ込む。ここに管理化が起こり、画一化が起こる。時には侵略ですらあるのだ」。これは昔のことを言っているのではないのです。今年の5月に教団の間安使に行った時に聞いたのです。「伝道は侵略だ。侵略とは何か。自分が変わらないで相手だけを変えようとするのが侵略なのだ。だから伝道は御言を宣べ伝えるという大義名分の元に、ここで言えば『伝道』という神聖な名で相手を変え、自分は決して変わろうとしない。そして画一化させ、管理化し、教会の型にはめ込む。それは侵略だ」。なにをかいわんや、です。

私たちは診断書、処方箋を書かなければならない。それは何か。7つにまとめてみました。せっかく今回が12回目の公開講演会、完全数でありますから、同じく完全数である7つのことをいいたいと思います。

1) ヒューマニズムへの傾斜・転落に歯止めをかける。ヒューマニズム、人間中心主義、アナキズム、無政府主義、なんでもありだという転落に対して歯止めをかける。これは垂直的な関係の回復です。キリストの主権とそれへの服従という基本的な告白を持つなら、これに対して歯止めをかけることが出来ると思います。ゆえに、なんととっても信仰告白に堅く立つということしかありません。

2) 神の言葉の絶対性、優位性の確保。これも垂直的関係の喪失から出てきたことです。神の言葉による変革を目指すのであって、イデオロギーによる変質にたいして歯止めをかけることが出来ます。

3) 福音への確信。これこそ基本です。罪の赦し、体の甦り。私たちはこの福音によって肯定されている命を輝かせていくのです。「にもかかわらず然りとされている」、そういうことにおいて私たちは否定の嵐を、罪赦されている肯定の恵みへと変えていく。だめだ、だめだ、だめだ、と言い過ぎます。よしとされている現実。私たちは意味あるものとされている。肯定されている命を輝かせて行くことにおいて、私たちはもっともっと積極的に自分の命を、お互いを、輝かせていこうではありませんか。

4) accentuate the positive という言葉があります。肯定的なことをもっと強調せよ、という意味です。私たちはお互いもっとかけがえないものとされてい

伝道こそ教団の使命

る、肯定されているものとして、互いに高めあっていく。これは福音への確信から出てくることです。そして、牧師としての喜びを保持するということです。伝道という場合はやっぱり伝道のプロとしての牧師が問題になります。これを言うと、聞いていられなくなるようなことでもあるのですが、私はあるところで聞きました。教区報に書いてあったことだから公開してよいと思うのですが。昨年日本基督教団の伝道委員長会議というものが持たれました。伝道を何とかしようということで、各教区の伝道委員長が召集されました。そしたらですね、一人の出席した信徒の代表が、その教区は伝道路線に対して激しく反発しているのでありますけれども、私たちが最も遠いと思える教区の信徒が、「伝道が停滞している。牧師を鍛え直す必要がある。問題は、牧師だ」。こう言ったそうです。合同のとらえなおしとともに、牧師の鍛え直しというものが重要だということになります。牧師であることが喜びでなくなっているのなら、どうして福音のよきおとずれが告げ知らせられるでしょう。

5) 終末論的信仰と霊性の回復。いうまでもないことです。私たちは、ここからここまでどう楽しく生きるか、というこの世の世直しをしているのではない。終末論的な信仰、そして目に見えない世界にあるスピリチュアリティ、霊性の豊かさを私たちは御言をいただき、霊的な命をいただくことなしに私たちは生きることが出来ない。あまりにも見えるものに偏重しすぎています。教会が霊的なまなざしを持たずして、何が見えるのでしょうか。

6) 心情的傾きより決断すること、また法感覚の重要視。法に対するセンスの問題ということです。非常に心情的傾きが強いのです。泣きごと、ごねごと、きれいごと。この三悪に対して、本当に「然り」「否」ということをはっきりしていかなければならないと思うのです。「まあまあ」とか、「話せば分かる」とか。話しても分かりません。時には決断しなければならない。こう言うことにおける「否」「然り」を言う気概を与えられたいと思います。「被害者だ、被害者だ」という人に限って、自分の加害者性を全然理解していない。どういふことでしょうか。「教団神学」というものがあります。天皇制、ヤスクニ、また沖縄、アジア、部落民。こういうものに対する差別を撤廃すると言いなが

ら、非常に逆差別をしていることに対して感覚が麻痺している。被害者だと言う人に限って非常に加害者的である。自由を叫びつつ強制し、解放を唱えつつ拘束しているのはどういうことなのでしょう。…同士に言ってもどうしようもないので、教団の議場で言い続けていくことにします。

7) 伝道戦線の拡大。伝道協力における多様性を持って私たちは戦線を開いていきたいと思います。他教区に行くと、東京の教会の元気のなさが気になる、と言われます。人をどんどん送っているのだけれども、と。そういう意味におきまして私たちは東京教区も責任があると思いますし、全体教会として、開かれた教会として、伝道協力における多様性、そのことによって「与えなさい、そうすれば与えられるであろう」。そういうことを喜びの内に実感させられていきたいと思います。

教団がどうこうと言うより、私たち一人一人の信仰者が、本当に神の前に悔い改めなければならないと思います。どこかで福音の合理化、信仰の御利益化、信仰生活の個人生活化というものがあつたのではないか。その間隙をついて、もうもうたる造反運動に対して明快なNOを唱えきれなかったということも反省しなければならない。

現代社会の状況。ギャロップ社と読売新聞が昨年、「21世紀の課題」というアンケートを採りました。これもしつこいですけど7つです。

アメリカでは麻薬汚染、凶悪事件・犯罪の多発、家庭や地域社会の崩壊、エイズの感染拡大、失業と雇用不安、教育界の混乱、人種間の軋轢。人間はこの問題で悩んでいます。21世紀においてこの問題を担っていく、ということです。

日本では、税金など国民負担の増大、少子化・高齢化、自然破壊・環境汚染、景気低迷、財政危機と再建、凶悪犯罪の多発、物価高。この7つが日本では挙げられていました。

日本はやはり経済立国であって、7つの内4つが経済です。経済によって立つ者が経済によって滅びるとは言いませんが、この4つまでが経済というのも日本らしいと思います。とにかく、こういう状況にあつて私たちは、私たち自身がこのような問題で日々心をすり減らしている。

伝道こそ教団の使命

貧困と飢え、民族紛争、核の脅威、自然災害、財界・政界の体質腐敗。多くの暗さがこうして人々の心を覆っています。かつてこれほどの災禍が短期間に集中したことはないのではないとも言われます。こういう中で私たちはこういう課題と向き合いながら、毅然としていくのです。容易でないことは知っています。しかし私たちはここでこそ、このような状況に相対していくのだということを確認していくのです。これは現代だけの問題だけではないのです。今の時代固有の課題ではないのです。コヘレトの言葉 5 章16節にもこうあります。「その一生の間、食べることさえ闇の中。悩み、患い、怒りは尽きない」。これが私たちの人生であり、私たちを取り巻く環境です。そういう中で私たちは御言を聞くのです。

どこを突いて伝道するのでしょうか。まず、人の心のむなしさ、ということです。今挙げた問題の中で「むなしさ」ということが最大の課題でしょう。永六輔の『大往生』のなかにも書いてあります。『悲しい、つらいはなんとかなりますよ。だけど、虚しいというのはねえ、どうも……』。このむなしさ、ここに御言は突き刺さります。

孤独。人の心をノックすれば「孤独、孤独」と声がする、そう聞いたことがあります。マザー・テレサは「この世は何の問題で悩んでいるか。何の病で悩んでいるか。それは、unwanted, 誰からも必要とされていない、という最大の病だ」。unwanted, 誰からも必要とされていない人間の孤独の中で神のwanted, 「あなたが必要なのだ」という声を私は聞くのです。そして私たちは神のwantedに応えていくのです。

死の恐怖。現世社会の肯定、今の享楽社会のあり方は、「死を見たくない」ということの裏返しではないでしょうか。死を見ないための、そしてそこからの虚無の奈落を見ないための享楽でなければ幸いです。死というものをみんないやがっている。病院でも 4 号室がない。教会付属の駐車場で 4 番がないところがあると聞きました。「死」というのがいやがられる。14番や24番までないということです。どういうことでしょうか。

私はこういう小学生の詩をこの前見ました。「4 という数字」という題です。

「4をみんな嫌う。4は死につながるからだ。しかしぼくは違う。辛抱，試練，幸せの『し』と思っている。ぼくは4年4組4番です」。いいですねえ。非常にいいですよ。梅津大樹くん，秋田小学校。

私たちも「し」を避けるのなら，辛抱，試練，幸せのしと思っている。これを選んだ詩人も「それに死は詩とも同じ音ですね」と言っている。私たちは死の恐怖が蔓延する中にあって，それを福音の光，まさに復活の恵みをもって，しを辛抱，試練，幸せと思って，それを以て私たちは死によって鍛えていくのではないかと思います。これは福音の恵みだと思います。

伝道する姿勢。

①「神の言葉である聖書に確信を持って語る。」当たり前なことじゃないかと思うのですが，これがなかなか当たり前ではない。聖書が神の言葉である，この確信を持って語ることにしましょう。

②「主イエスに感ずる心の躍動を持って福音を伝達する。」当然喜びにあふれます。心の躍動。あのニーチェでさえ言ったのです。「君が私に救われよと言うのならあなた自身が救われた様子でなければならない」。

③「キリスト者の間における霊的一致をもって語る。」ですから私たちは各教会主義ではなく，全体教会のための重荷を担うのではないのでしょうか。霊的一致をもってしか福音を語れない，となれば何とか教団が伝道する教団として，信仰告白に立つ教会として，私たちは一つでありたい。その願いを持ってキリスト者間における霊的一致を持って御言を語るのです。ですから，伝道するために私たちは教団問題に関わらざるを得ないのです。

ペンテコステの記事の中で「すると，ペトロは11人と共に立って，声を張り上げ，話し始めた」。ペトロは，声を張り上げて，11人とともに立って話した。語ったのはペトロ一人です。しかしあとの11人の者も一緒に立ってそれを支えたのです。ともに立って，霊的一致をもって語るということが欠くべからざるものとなります。

④「緊迫感を持って語ります。」今，この時は二度とないかも知れないと思います。ですから，今語ります。いつまでも機会があると思って時を逸するこ

伝道こそ教団の使命

とはなんと多いかと、私自身思います。「いつか、そのうち、近いうち、やがて、そのうち、折を見て…」そんなことを言っている内に、「ついに、やっぱり、とうとう、だめだった、」そう言うことが多いのです。ですから緊迫感を持って今をとらえよ。

⑤「生き生きとした生活を持って語る。」あれほど苦しめられても、あれほど入退院を繰り返しているのに、なんであの人はあんなに生き生きとしているのだろう。これが波紋を呼んでいくのです。御言に裏打ちされて、神我らとともにいますが故に、我弱くとも恐れはあらず。こういう人がいることで必ず周りに波紋が出てくるのです。

先ほど棟居勇先生が開会礼拝説教でブルンナーの引用を下さいまして、思いだしました。私はブルンナーが来日した時にはまだ少年でしたから、後でブルンナーの影響を様々な形で残しているのを見ました。ブルンナーはこう書いています。「日本の教会の伝道は、羊飼いが羊を生んでいる。羊は羊が生んでいくものだ。羊飼いが羊を養い、羊が羊を生んでいく。これが日本の教会になればならない」。なるほどと思いました。今は下手をすると羊飼いや羊を生まない。誰が生むのでしょうか。やはり、羊が羊を生んでいくのだと思うのです。生き生きとした生活をもって。なにも元気がよければよいというものではないのです。私みたいに声と態度が大きければいいというものではないのです。本当に苦しみにあっても、そこで感謝の思いを忘れずに立っていくことが波紋を呼びます。

ザビエル。彼が日本に来る前に、漂流した日本人ヤジローに対して、これから君の国に行って伝道しようと思っているが、どういうことに気をつけたらよいか、と尋ねたそうです。彼はこう答えました。「日本の国民は、よい教えは耳からではなく目から入ると存じております」。それだけを強調すると問題があります。しかし、福音に押し出されて生き生きと生活をもって語るということとは必須な事です。

⑥「社会的関心を払いつつ語る。」私たちは、さまざまなものに取り巻かれています。右に左に揺れて止まない現実の中で、「然り」、「否」を唱えていか

なければならない。ですから、アンテナを高く張って、私たちは政治社会問題、社会的関心を払います。福音に押し出されて、であります。イデオロギーのゆえではありません。私たちは意味と慰めの孤島に漂うのではありません。社会のただ中において、アンテナを張りながら、教会にも社会委員会を置きながら、語るのです。愛をもって語るのです。「君のいっていることは正しいかも知れないけれども、愛がない」。これでは通じません。

⑦「福音を単純に語る。」単純に繰り返し語るのです。私は教会の青年に語るのです。「VSOPは重要だ。Vitality, Speciality, Originality, Personality。これをもって青年は生きるのだ」。あんまり繰り返すので、very special one patternのVSOPになってしまった。しかし、福音を単純に何遍も語ることはいいのです。ですから、very special one patternでいいのです。そういう形で、私たちは福音を単純に語るのです。

こんな言葉が目に入りました。「悪しき説教、ひなびた礼拝、外面化した信仰、教会の機能のあらゆる段階における便宜主義、創造的な人間関係の欠如、不安、怠慢、臆病、ボスの存在の横行、愛のなさなど。人間的な、あまりにも人間的なものの海。これらが教会をむしばんでいないか。」これはカトリック教会の司祭の言葉とありました。しかしこれはカトリックだけのことなのでしょう。私たちはそういう意味で、本当に考え直さなければならないと思います。

燃えるということ。伝道に燃える群れ、ということで、私たちは最後に「燃える」ということを考えたいと思います。燃えるためには、乾燥していなければなりません。乾いた木です。これがよく燃えます。じめじめ、じゅくじゅく、じとじと、の3じのあなたはいけません。これは罪赦された者として、じめじめ、じゅくじゅく、じとじと、は、これから梅雨を迎えますが、これは要らないのです。点火するために、御言の火を私たちは受けなければなりません。空気が必要です。聖霊の息吹です。そして、たくさんの薪としての、お互いの共同体が必要です。

「道々お話になった時、また聖書を説き明かして下さった時、心が内に燃え

伝道こそ教団の使命

たではないか」。エマオの旅人はそう言いました。私たちの現実でありたいと思います。第二テモテ 2 章 6 節。「そういうわけで、わたしが手を置いたことによってあなたに与えられている神の賜物を、再び燃えたたせるように」。そういう燃え立たせ方が必要だと思います。火が燃え立つことによって存在するように、教会は伝道することによって存在するのです。ロマ書12章11節にこうあります。「怠らず励み、霊に燃えて、主に仕えなさい。希望をもって喜び、苦難を耐え忍び、たゆまず祈りなさい」。霊に燃えて主に仕える。これが伝道に燃える私たちの教団のありようでありたいと思います。

「神はもしそうしようと思えば、ご自身によって、あるいは天使によって、ご自身の意志を、もう人間の反抗を許さないような仕方で伝えるということも可能であったと思うのです。しかし神はそうされず、宣教という真に不完全な方法を用いたもうたのは、それによって人間と人間とが結ばれ、教会が生まれるためであった」。有名なカルヴァンの『キリスト教綱要』にある言葉です。「それによって人間と人間とが結ばれ、教会が生まれるため」。わたしたちはそういう意味において教会、主の体なる教会を形成させていただきたいと思います。依然として私たちは開拓的精神を持ち続けるべきです。困難を貫いて、多くの信仰の先達たちが開拓精神をもって教会を切り開いてきた現実が今日あるのです。であるならば、私たちも開拓スピリットをもって、伝道に燃える群れを形成していきたいと思います。

私らしく、また語呂合わせで行きたいと思います。

「か」型にはまらず、肩肘張らず。

「い」急がず、威張らず、意気がらず。

「た」短気起こさず、ためらわず。

「く」苦にせず、腐らず、くたびれず。

「か」「い」「た」「く」精神貫こう、こういうことになるのではないかと思います。

東北教区を問安していた時に、宣教師に対する感謝が最後になされました。47年間日本で伝道して隠退することになったウィリアムという宣教師ご夫妻に

対する感謝が述べられました。それはそれは和やかな、感謝に満ちたひとときでした。しかしウィリアム宣教師夫人が、こう言ったのです。最後に。「お葬式より、洗礼式が多くなるように、祈っています」。シーンとしてしまいました。主が天に召して下さる、それも本当にありがたい。しかし地上において教会へと召して下さる魂を何とか増やしていただきたい。そういう祈りなのでしょう。私たちはそういう意味において、「そうせざるをえない」、燃える思いに励まされて、この時代に生かされている者であるがゆえに、ともに主にあって召されている幸いの内を、伝道という一点に思いを込めて、残る生涯を捧げていきましょう。

(やまきた のぶひさ)